九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 平壌師範学校について ： 植民地朝鮮における教員養成の一事例

朴, 永奎
九州大学大学院 ： 博士後期課程3年

https://doi.org/10.15017/1033

出版情報：飛梅論集. 3, pp.107-128, 2003-03-28. 九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学大学院教育学コース院生論文集，2003，第3号，107－128頁
Bull. Education Cource, kyushu U., 2003, Vol.3, pp107－128

# 平壌師範学校について

## ―植民地朝鮮における教員養成の一事例―

朴　　永　奎*

## 1．はじめに

「教育」は、時代によってさまざまの異なった視点から定義することができるが、根本は、人間（主に子どもあるいは若い世代）を対象にして彼らを「善く」しようとする働きかけである。むろん、時代や社会によっては、働きかけの対象や内容が異なったり、働きかける側も親や大人に限らず、国家という公的機関であった場合もある。特に近代においては、国家の近代化に必要と考えられる知識・技術を十分に身につけた人間を作り上げるため、国家は学校体系を活用して必要な人材を社会に送り出した。そのよい例として挙げられるのは、日本における近代化である。そして、韓国の旧韓末における近代化も学校が活用されたことについては同様であったが、植民地期においての主な変化は、働きかけの対象が「朝鮮（人）」に、働きかける側が「日本（人）」になったことである。

渡部宗助は、植民地教育史研究における「教育学的発想」、すなわち教育が生きた人間を対象に、ある教育内容をもって、人間が意図的に働きかけてその対象の発達・変革を促す作用である(1)と定義し、「教育学的発想」による研究方法の重要性を述べており、この点において筆者も同感である。さらに、渡部は1990年代後半、日本における植民地教育研究は盛んに行なわれているが、各研究者が特定植民地の特定問題を個別に研究する傾向が見られ、トータルな問題意識が希薄になっている、と批判しながら、植民地を含む帝国日本の教育の根底的な研究の必要性を語った。(2)

1980年以降、韓国においての研究は、植民地教育政策の本質及び実状に関する実証的批判的研究が主に行なわれ、その代表的な研究者である鄭在哲の『日帝の対韓国植民地教育政策史』は、「日帝下の教育政策・初中等学校教科課程を、授業時数そして教科書等の分析を通じて日帝植民地主義教育の非教育性の実体と韓国史を歪曲して注入した教育実状を実証的に深層分析し、日帝の韓国民族弾圧を徹底的に批判した」(3)、と評されている。

このように韓国における植民地期の教育史研究は、日本による教育政策・教科書・教育課程などを対象にしたのが大半を占めており、教員養成に関する研究も、制度的な考察、文献中心、そして「侵略対抵抗」の図式で取りあげたものが多い。

上述したように教育とは、人間が意図的に働きかけてその対象の発達・変革を促す作用であり、

*九州大学大学院博士後期課程３年

その場として学校が活用されたとすれば、働きかけの対象（生徒）や働きかける側（教員）に関する研究は必然である。日本においては、稲葉継雄著『旧韓国の教育と日本人』（九州大学出版会、1999年）『旧韓国～朝鮮の日本人教員』（九州大学出版会、2001年）のような研究があるが、韓国においてはそうした研究があまりなされていないのが実状である。

そこで筆者は、以上のような認識を踏まえながら、働きかけの対象と働きかける側の両側をうかがうことができる教員養成機関である師範学校に着目して、当時の師範学校（平壌師範学校・大邱師範学校・京城女子師範学校）生徒らとのインタビューやアンケートを実施した上、夫々の学校を事例として取り上げ、どのような人々が生徒になり、どのような教育を受けたのかなどを考察してきた。(4)

本稿もその一事例として、朝鮮の北部地域における最初の、そして1937年までは唯一の官立師範学校であった平壌師範学校を対象にし、教職員や生徒の学校生活を追究するのがねらいである。

## 2．学校沿革

第1次朝鮮教育令（1911年）において独立の師範学校を認めず、その代わり、初等普通教育に従事する教員の養成機関として、官立の高等普通学校及び女子高等普通学校に、修業年限1ヵ年の師範科、修業年限1ヵ年以内の教員速成科が置かれることになった。そして1911年10月、京城及び平壌の高等普通学校に教員速成科が置かれ、1914年4月、京城・平壌・京城女子高等普通学校に師範科が新設されると共に教員速成科は廃止された。これが、朝鮮総督府の平壌における教員養成の始まりである。

第2次朝鮮教育令（1922年）において、小学校教員及び普通学校教員の養成を目的とする独立の師範学校を認め、1923年3月31日、特科を中心として平壌師範学校の前身である平安南道公立師範学校が認可された。しかし、教員需要の増加、道財政の薄弱、多数の朝鮮人の国語力不足などが理由として挙げられ、各道立師範学校は「朝鮮総督府告示第28号」により「昭和六年三月三十一日限リ廃止ノ件認可」された。(5)そして1929年4月18日、勅令第83号朝鮮総督府諸学校官制の改正により平壌師範学校が設置された。以下は同校の略年譜である。

1929年　5月 3日　大田公立中学校長津田信を校長に任命。
　　6月 1日　朝鮮総督府告示第196号により尋常科および特科を置き、開校。元平安南道公立師範学校校舎を仮校舎として使用。
　　同　日　尋常科第1学年95名の入学式。なお、朝鮮総督府告示第197号により、元平安南道公立師範学校特科第3学年29名、同第2学年39名を当校特科に編入。
1930年　3月22日　特科29名の卒業式。
　　4月11日　尋常科第1学年87名の入学式。
1931年　3月31日　特科を廃止。

1931年　4月 1日　師範学校規程第101条第2項の規程により講習科を設置。
1934年　3月20日　尋常科第1回70名の卒業式。
1937年　4月15日　勅令第131号朝鮮総督府諸学校官制中改正により附属普通学校を設置。
1940年　4月　修業年限1ヵ年の特設講習科設置。
1943年　3月　修業年限3ヵ年の本科設置。
1945年　6月　日本軍による学校校舎利用のため、新陽国民学校に施設物の移転中8·15解放。

## 3．教職員

平壌師範学校の教職員に就く前後の経歴を考察することで、校長・教諭らの具体的な人事を把握するのが本節の目的である。なお、本節の考察にあたっては、『旧植民地人事総覧』(朝鮮編)を参考にし、稲葉継雄の『旧韓国～朝鮮の日本人教員』やその研究方法を参照した。

### 1）校長

第1代津田信は、1878年茨城県水戸市に生まれ、1900年東京高等師範学校本科英語部卒、同年三重県師範学校教諭、そして1907年同校附属小学校主事を経て1915年10月熊本県視学官に転じ第二課長に命じられた。1918年7月退職、そして同年同月朝鮮に渡航した。朝鮮における経歴は、京城中学校教諭（1919～22年度)、東莱高等普通学校長（1923～24年度)、大田中学校長（1925～28年度)、平壌師範学校長（1929～38年度）を歴任した。彼の6男、誠は、「父は昔の武士道の精神と孔孟の仁義礼智信の教えと、東京高等師範で教えられた当時としては近代的なペスタロッチの教育理念に裏打ちされた信念を持つようになった」と述べている。(6)当時の生徒らによると、校長室には大きなペスタロッチの油絵が、まるで教育愛の象徴のように飾られていたという。(7)また津田はよく「教育と言うのは、子ども達の無限に伸びる潜在能力を見出し、その才能を引っ張り出してやって、後は本人が好きになって自分で才能を伸ばし発揮するように仕向けることだ」と述べ、自由でノビノビした教育を心掛けていたことがわかる。なお、1939年3月退官後水戸に戻り、1944年に亡くなった。

第2代高田邦彦は、広島高師卒、大正日日新聞社京城通信部（1919年)、総督府編修書記（1918～19年度)、京城女子高等普通学校嘱託教員（1921年度)、京城師範学校嘱託教員（1922～26年度)、京城高等商業学校教授（1926～27年度)、元山商業学校長（1928～30年度)、忠清南道視学官(1931～32年度)、全羅南道視学官（1933～34年度)、釜山第二商業学校長（1935～37年度)、総督府視学官（1938年度)、平壌師範学校長（1939～1942年度)、釜山第一商業学校長（1943年～以後不明）に在職した。

第3代上山道造は、春川師範学校長（1940年度)、京城工業学校長（1941～42年度)、平壌師範学校長（1943～45年度）を歴任した。

このように、平壌師範学校長に就任する前の経歴をみると、津田の延べ約30年の豊富な教育行政

の経験、高田の教諭・教授・校長・編修官・視学官など、円熟した教育家が校長に就いたことがわかる。そして、「そもそも高等師範学校は、文部省直轄学校として帝国大学に次ぐ地位を占め」ており、「必然的に国策に忠実な教育者の集団とならざるをえなかったであろう」[8]という稲葉の見解からみると、津田（東京）・高田（広島）が高等師範学校卒であったことは、朝鮮総督府当局の官立師範学校に対する認識の一端を窺うことができる。

また、平壌師範学校の歴史17年のうち、校長在任期間は、初代の津田が10年、2代高田4年、そして3代上山3年であるが、津田の10年は、彼に対する高い評価を裏付けるものでもある。平壌師範学校の歴代校長が僅か3名であったことは、大邱師範学校長の6名に比して安定した学校経営が行なわれたことを窺わせる。2代高田の赴任は、第3次朝鮮教育令の改正1年後であり、同じ時期の大邱師範学校にも市村秀志が第3代校長として就任した。そして、高田以降平壌師範学校に赴任した教諭らの経歴は、高田が在職した学校と商業学校からの者が多い。これに関しては後述する。

### 2）教諭

教職員は、設立年度（1929年）の15名から、30年代の附属学校訓導を合せると各年最大40余名まで上った。ここでは平壌師範学校附属学校訓導を除いて、教諭として在任した者の経歴を年代別に紹介する。なお、教諭の履歴において小学校訓導→小、普通学校訓導→普通、高等普通学校教諭→高普、中学校教諭→中、師範学校教諭→師範、農業学校教諭→農業、商業学校教諭→商業と記す。

設立年度の教諭は以下のとおりである。

| 氏　名 | 履　歴 |
|---|---|
| 日高宇光 | 大邱中1923～27年度、平安南道師範1928年度、平壌師範1929～33年度 |
| 阿部忠助 | 京畿道師範1927～28年度、平壌師範1929～33年度 |
| 百井　盛 | 平安南道師範1927～28年度、平壌師範1929～36年度、鏡城農業1937～43年度 |
| 服部健夫 | 平壌師範1930～33年度、鏡城高普1934～36年度、城津高普1937年度、羅南中1938～39年度 |
| 橋本健二郎 | 京城第一高普1927～29年度、平壌師範1930～33年度 |
| 東口新二 | 鎭南浦公立尋常高等小1918～24年度、平壌高普1928年度、平壌師範1929～36年度 |
| 韓　悌泳[9] | 京城帝国大学卒、平壌師範1929～45年度 |
| 趙　炳旭 | 広島高師卒、平壌師範1929～35年度 |
| 小川権三郎 | 平壌師範兼書記1929～39年度 |
| 片岡晴太郎 | 東京音楽大卒、忠清南道師範1929年度、平壌師範1930～45年度？ |
| 中原民蔵 | 慶尚北道師範1927～28年度、平壌師範1929～36年度、木浦高等女学校長1937～39年度、新義州東中学校長1940年～？ |
| 佐伯銀太郎 | 広島高師卒、平安南道師範1927～28年度、平壌師範1929年度、江原道視学官1935～38年度 |
| 宮原義見 | 江原道師範1926年度、平安南道師範1927～28年度、平壌師範1929～30年度 |

以上が官立平壌師範学校設立当時の教職員であり、平壌師範学校の前身とも言える平安南道師範学校から異動した者（日高・百井・趙・佐伯・宮原）が多く、京畿道（阿部）・忠清南道（片岡）・慶尚北道（中原）のように、各道の公立師範学校からの異動者を合せると、設立当時の教職員の半分以上は公立師範学校勤務歴を持っている。

1931年に赴任した教諭をみると、以下のとおりでる。

| 氏　名 | 履　歴 |
|---|---|
| 中元宇光 | 平壌師範1931年度 |
| 内野政義 | 東京高師卒、京城第一高普1929～30年度、平壌師範1931～39年度、忠州中学校長1940～43年度[10] |
| 福井幸成 | 忠清南道師範1929～30年度・兼公州高普1930年度、平壌師範1931～35年度 |
| 田鹿昴[11] | 東京高師卒、平壌師範1931～39年度、光州師範1940～41年度 |
| 宮本惣吉 | 清州尋常高等小・兼忠清北道師範1927～29年度、清州普通・兼全羅北道師範1930年度、平壌師範1931～39年度 |
| 高田哲太郎 | 平壌師範1931～40年度、京城師範1941～43年度 |
| 朴相埈 | 金陽公立普通学校副訓導1919～20年度、泗南公立普通1921～25年度、慶尚南道師範1926～30年度、平壌師範1931～39年度 |
| 斎藤正夫 | 平壌師範1931～35年度 |
| 丸岡眞幸 | 平壌師範1931～34年度 |
| 続　典[12] | 広島文理大学卒、平壌師範1931～36年度 |
| 小島六三 | 教練担当、平壌師範学校嘱託教員1931～39年度 |

1936年の『校友会誌（第6号）』によると、日高（長崎県）、阿部（東京）、橋本（三重県）、丸岡（東京文理科大学）は内地に、斎藤は満洲国安東中学校へ、そして福井と続は死亡と記している。

そして1932年以降赴任した教諭は以下のとおりである。

| 氏　名 | 履　歴 |
|---|---|
| 金在詰 | 京城帝国大学卒、平壌師範1932年度 |
| 崔徳鉉[13] | 広島高師卒、京城師範1931～32年度、平壌師範1933～45年度 |
| 小谷正道 | 平壌師範1933～36年度 |
| 原竹男 | 春川高普1929～33年度・兼江原道師範1930年度、平壌師範1934～38年度 |
| 李崇寧[14] | 1933年京城帝国大学法文学部卒、平壌師範1934～45年度 |
| 宮崎信雄 | 京城帝国大学卒、平壌師範1934～45年度 |
| 田崎貞男 | 平壌師範1934～41年度 |
| 石井亀蔵 | 早稲田大学商学科卒、平澤公立普通1918年度、江華公立普通1919年度、会寧商業1927～31年度、平壌師範1934～40年度、新義州商業1941年～？ |
| 太田長夫 | 東京高師卒、平壌師範1934～40年度、京城中1941～43年度 |
| 諸橋哲夫 | 関東学院英文科卒、平壌師範1935～40年度、開城中1941年～？ |
| 小林芳夫 | 平壌師範1935～40年度、咸興師範1941～43年度 |
| 城島義一 | 文部省検定試験、平壌師範1935～41年度 |
| 風間勝顯 | 京城東大門公立尋常小1921～25年度、京城第二高等女学校教諭1931～34年度、平壌師範1935～39年度、羅南中1940～43年度 |
| 杉崎勝蔵 | 平壌公立農業1911～26年度、済州農業学校長1927～31年度、平壌師範学校嘱託教員1935～39年度 |

| | |
|---|---|
| 松元義祐 | 忠清南道師範1928～30年度・兼公州高普1929～35年度、平壌師範1936～39年度、晋州師範1940年～？ |
| 新谷　智 | 東京高師卒、平壌師範1936～38年度 |
| 柴田忠雄 | 平壌師範1936～45年度 |
| 横井栄一郎 | 東京音楽大卒、平壌師範1937～41年度 |
| 森山　勲 | 広島高師卒、平壌師範1937～40年度 |
| 阿部三郎 | 咸興農業1934～36年度、平壌師範1937～41年度 |
| 小山良雄 | 平壌師範1937～41年度 |
| 屋敷盛二 | 東京物理学校卒、平壌師範1938～41年度 |
| 金　爽栄 | 平壌師範1938～39年度 |
| 高岩清次 | 元山商業1929～31年度、公州高普1932～35年度、釜山第二商業1936年度、平壌師範1939～41年度 |
| 赤城五郎 | 平壌師範1939年度 |
| 山下一彦 | 平壌若松尋常高等小1928～34年度、群山中1935～38年度、平壌師範1939～41年度 |
| 長澤五郎 | 平壌師範1939年度、順川中1940年度 |

以上が1930年代に着任した教諭であるが、この人事には幾つかのパターンがある。すなわち、京城第一高等普通学校教諭（内野）または京城第二高等女学校教諭（風間）、京城以外の高等普通学校教諭兼公立師範学校教諭（福井・原竹・松元）、小学校または普通学校訓導兼公立師範学校教諭（宮本・朴）、商・農業学校教諭（石井・杉崎・阿部・高岩）の経歴を持つ者が赴任した。そして、29年度に赴任した韓をはじめ、金・李・宮崎は、京城帝国大学卒であり、金は着任1年後に死亡したため、その後を李（朝鮮語）が継いだ。なお、李と宮崎は予科の同級生であった。内野・田鹿・太田・新谷は津田（初代校長）と同じ東京高師卒であり、趙炳旭・佐伯・崔・森山は高田（2代校長）と同じ、広島高師卒である。

こうした人事のパターンを通しては、当時の朝鮮社会における官立師範学校の位置付けを考慮すると、高等普通学校（朝鮮人中学校）や公立師範学校にて教諭としての才能や経験豊富な者が着任したと推測することができる。そして、一般的に「朝鮮教育界において尚志会員（広島高師卒－朴註）がトップ・リーダーではなかった」ものの、「尚志会員がいったん校長となった学校では、これを契機に会員が集中する傾向がみられた」[15]といわれているが、平壌師範学校においても同様な傾向があった。

1940年・41年頃は、全教職員のうち半分くらいが異動した。この時期の人事は、前述したように第2代校長である高田が在任した学校の勤務歴を持つ者が多い。また、商業学校での在職歴を持つ者が多いのも特徴である。なお、1940年に赴任した波根治郎の記録によると、40年以降の教職員のうち、召集された者以外は、45年まで在職していた可能性が高いと思われる。[16]そしてこの時期、朝鮮人の附属学校訓導及び教諭らは改名したので、参考に朝鮮人名も記しておく。

1940年度に赴任した教諭は、以下のとおりである。

| 氏　名 | 履　歴 |
|---|---|
| 松延信蔵 | 江景普通1935～36年度、全州師範1937～38年度、京城南大門尋常小1939年度、平壌師範1940～45年度 |
| 蓑田眞支 | 平壌師範1940年～？ |
| 高橋　武 | 京城師範学校訓導1929～36年度、釜山中1937～38年度、光州師範1939年、平壌師範1940年～？ |
| 北村篤太郎 | 釜山第二商業学校嘱託教員1936年度、釜山第二商業1937～39年度、平壌師範1940～41年度 |
| 山口好見 | 公州公立尋常高等小1923～25年度、平壌師範1940～41年度、京畿高等女学校教諭1942年～？ |
| 三門憲太郎 | 平壌公立尋常高等小1922～23年度、忠清南道視学官兼大田中1932～33年度、大田高等女学校教諭1934～38年度<br>景福中1939年度、平壌師範1940年～？ |
| 林　照雄 | 江景商業1933～35年度、釜山第二商業1936～37年度、平壌師範1941年～？ |
| 谷口徳行 | 清津商業1939～40年度、平壌師範1941年～？ |
| 西崎　清 | 平壌師範1941年～？ |

高村徳彦（崔徳鉉）、延原崇（李崇寧）、金治勇[17]（平壌師範1941年～45年度）、そして藤原照等・尾野了介・杉村大彬・前田光義は41年度に赴任した教諭で、波根治郎は1940年広島師範学校から平壌師範学校の附属小学校の主事に赴任、1941年に召集されてから学校に戻り、1945年3月2度目に召集された。

以上のように、第2代校長高田と共通の勤務歴を持つ者は、高岩・北村・三門・林であり、そのうち三門以外は、釜山第二商業学校教諭→平師範学校教諭である。そして農業学校教諭からの者はおらず、商業学校教諭からの者（高岩・北村・林・谷口）が多い。

なお、43年に赴任した高木幸次（京城帝国大学卒、春川普通1928～29年度、春川尋常高等小1930～32年度、青龍普通学校長1933年度、晋州師範1940～43年10月、平壌師範1943～45年度）は、「私が晋州師範から平壌師範に赴任したのは昭和一八年十一月であった。上山校長西崎教頭波根舎監長以下四十名位の教職員」[18]と述べており、上述した波根の記録と、そして1929年度から39年度までに赴任した者の在職期間が4年以上であったことを合せて考えると、1940年以降の教職員は、45年まで平壌師範学校に在職していたと言える。

以上のように、延べ80余名が平壌師範学校に在職していたことがわかり、そのうち9割以上が日本人であった。9割以上が日本人であった平壌師範学校の教員構成は、偶然ではなく、教員養成は内地人を軸にして行なうという朝鮮総督府の意図的な人事であったことを示す。

## 4．生徒

平壌師範学校には尋常科（1929年設置・修業年限5年）、講習科（1931年設置・1年または6ヶ月）、演習科（1938年設置・1年または2年）、本科（1944年設置・1年）などが設置された。

尋常科生徒は、1929年から朝鮮人90人対内地人10人の比で募集したが、1943年からは朝鮮人18人対内地人92人と日本人の方が多くなり、こうした傾向は1945年まで続いた。1934～45年度教諭

であった李崇寧によると、校長が全職員の前で、総督府の教育政策変更について、「教師は日本人であるべきだ。したがって、今回、尋常科の朝鮮人の入学許容比率を前回とは正反対にすることを決定した」という。[19]この内容をみる限り、1943年度のことであるが、実際、同年度の「生徒募集」[20]の広告は42年度のと同様で、募集定員(100名)・入学資格項目においても変わった文言はなかった。

講習科は、1931年特科が廃止され、師範学校規程第101条第2項（講習科ノ講習期間ハ普通学校及其ノ高等科ノ教員タラムトスル者ニ対シテハ一年以上トシ普通学校教員タラムトスル者ニ対シテハ六月以上トス）の規定により設置された。主に朝鮮人で、内地人も在籍していたが、1939年以降の内地人は、39年11人・40年6人・41年4人・42年1人・43年1人と、少数であった。

なお、1939年以降は、戦争の長期化による物資の不足や値上げ、軍需景気の好況などによって教職に対する社会的な認知度が下がって、尋常科の場合自主退学する生徒が増えた。その大部分は上級学校進学のため、人文系中学校に転学したという。[21]ちなみに実際の退学者は39年24人、40年15人、41年23人、42年20人である。[22]こうした傾向に歯止めをかけるため、1929年～35年4割、1936年～41年3割であった官費生比率を1942年から全官立師範学校に対して「全員官費生」とし、そして月7円～10円の学資金を月15円～25円に引き上げた。

当時の事について、申鉉徳（1939年3月、講習科卒）は、「当時の就職の道は、金融組合書記、鉄道員、道・郡書記、各会社の書記職を挙げることができるが、これらより、1年の修業年限があっても、学費も安くて、報酬や社会的な待遇がよいので、師範学校を選択した」と語っており、山本邇利（1941年3月、尋常科卒）は、「小学校の6年のとき、担任教師の薦めで平壌師範を受験し、合格したが、入学してまず腰が抜ける程驚いたのは同級生（100名）が殆どオッサンばかりだったことだ。韓国籍90人日本国籍10人という割合だったと思う。日本国籍のわれわれも、かなりな競争率ではあったが、韓国籍の90人は‥‥(中略)‥‥ものすごい競争率を突破した人材ばかりということは入学して半年ばかり経って知った」[23]という。

では、朝鮮総督府学務局が作成した『1941年12月の第79回帝国議会説明資料』を通して、当時の状況を見てみよう。

国民学校教員ノ需要ハ教育機関ノ増設拡充ニ伴ヒ比年増加ヲ加ヘ他方教員ノ退職者モ漸次増加ノ傾向ヲ示シツツアリ、‥‥(中略)‥‥師範学校卒業者ハ二、六四〇人内外ニシテ他ハ内地国民学校教員ノ招致、教員試験合格者ノ採用其ノ他ノ代用教員ノ採用ニ俟ツノ状況ナリ其ノ師範学校卒業者モ前掲ノ如リ初等教育拡充計画(1937～42年－朴註)ノ急務ニ応ズル為大多数ノ短期速成ノ養成施設タル講習科ニ依リツヽアリモ輓近異常ナル人的要素ノ需要増大ニ伴ヒ該講習科ニ入学セシムベキ中等学校卒業者ハ他ノ方面ニ吸集(ママ)セラレテ師範学校ニ入学ヲ志望スル者激減ヲ表(不明)ルノツアレノミナラス教員ノ転退職亦激増シ加フルニ内地現職教員ノ招致モ内地ノ教員不足ト外地派遣教育職員取扱ニ関シ統制ヲ見ルニ至リタルニ依リ予定人員ノ招聘頗ル困難‥‥(中略)‥‥此ノ情勢ハ将来相当長期ニ亘リ継続ヲ見ルコトハ明カナル所ナルモ斯リチハ教員補充上多大ノ支障ヲ生ズベク而モ教員ノ養成ハ一定ノ期間ヲ必要トスル所ナルヲ以テ一面於テ可及的ニ中等学校卒業者ヲ獲得スルノ方途ヲ講

ズルト共ニ将来中等学校卒業者ヲ以テスル短期速成ノ養成施設ヲ廃止シテ志望者吸収ニ支障ナキ国民学校ヨリ連絡スル恒久的ノ養成施設ヲ以テスル師範学校ノ増設ヲ図ルノ緊切ナルモノアル認メ[24]

第2次朝鮮人初等教育普及拡充計画による就学率の増加に伴い、初等教員養成機関としての師範学校の増設や「大多数ノ短期速成ノ養成施設タル講習科」の生徒の増員にもかかわらず、教員の数は十分ではなく、「内地国民学校教員ノ招致」、「教員試験合格者」、そして「代用教員」を採用することで、教員不足を免れようとした。ところが、1938年度から本格的に実施した内地からの「招聘教員」も、「教員招聘班」[25]による招致活動にもかかわらず、「内地ノ教員不足ト外地派遣教育職員取扱ニ関シ統制」により「予定人員ノ招聘頗ル困難」であった。そこで、不足教員として「教員試験合格者」、「代用教員」を採用せざるを得なかった。しかし、「輓近異常ナル人的要素ノ需要増大」、すなわち軍需産業に大勢の中等学校卒業生が進出し、「講習科ニ入学セシムベキ中等学校卒業者ハ他ノ方面ニ吸セラレテ師範学校ニ入学ヲ志望スル者激減」した。さらに「教員ノ転退職亦激増」したので、教員確保のための多様な策が講じられることになり、これに合せて、中学校を卒業して上級学校に進学できない生徒に対して、可能な限り大勢の生徒が師範学校の講習科に進学するよう、各学校長宛に公文を送るなど積極的に奨励した。[26]1942年以降の「全員官費生」や「学資金引上げ」は、上のような背景のもとで行なわれたことになり、後述するように、生徒の7割以上が農業に従事する親によってサポートされたので、そうした策は生徒と親側にとっては魅力的であった。

次に生徒の出身地を調べるため、1936年度の平壌師範学校誌を参照するが、資料の制約上、1936年度しか明らかに出来ないことを記しておく。

**平壌師範学校生徒原籍地（1936年度）**

| 学年＼原籍地 | | 平北 | 平南 | 黄海 | 咸北 | 咸南 | 江原 | 京畿 | 忠北 | 忠南 | 全北 | 全南 | 小計 | 内地 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | 22 | 36 | 14 | 2 | 12 | 2 | 1 | − | − | − | − | 89 | 9 | 96 |
| 2 | | 23 | 28 | 14 | 2 | 9 | 4 | 5 | 1 | − | 1 | − | 87 | 10 | 97 |
| 3 | | 17 | 42 | 6 | 1 | 7 | 2 | − | − | − | − | − | 75 | 10 | 85 |
| 4 | | 21 | 24 | 4 | 2 | 10 | 2 | 1 | 1 | 1 | − | − | 66 | 9 | 75 |
| 5 | | 20 | 24 | 10 | 3 | 5 | 1 | 2 | − | 1 | − | − | 66 | 8 | 74 |
| 1カ年講習科 | | 22 | 22 | 17 | 16 | 4 | 2 | 5 | 7 | 7 | − | 1 | 103 | 25 | 128 |
| 6ヶ月講習科 | 前期 | 21 | 16 | 11 | 5 | 13 | − | − | − | 5 | − | 1 | 72 | 4 | 76 |
| | 後期 | − | − | − | − | − | − | − | − | − | − | − | − | 75 | 75 |
| 計 | | 146 | 192 | 76 | 31 | 60 | 13 | 14 | 9 | 14 | 1 | 2 | 558 | 150 | 708 |

出所：『校友会誌』平壌師範学校、第６号、1937年。

既に1912年4月、平壌高等普通学校は、教員速成科生徒募集にあたって「教員速成科ノ生徒募集ハ平安南・北・黄海三道長官ノ推薦ニヨルモノト一般募集トノ二種ト」[27]した。そして本科生徒募

集も1916年までは「募集人員中約半数ハ平安南北道及黄海道公立普通学校長ノ推薦ニヨル無試験入学ヲ許可」[28]し、1917年から1920年までは「一部」を、そして1921年には「三分ノ一以内」[29]を「平安南北道及黄海道公立普通学校長ノ推薦」によって選抜した。

平壌師範学校は、平壌高等普通学校のような地域限定募集はなかったものの、生徒の原籍地をみると、平南・平北・黄海・咸南・咸北の順であり、学校所在地である平南をはじめとする朝鮮の北側が大半を占めている。

これに対しては、平壌府尹松井信介の発言や朝鮮総督府『平壌府』の記述からその理由をうかがうことができる。

平壌は西鮮唯一の大都にして地方文化の中核たり、行政司法の諸官衙並立し公私の学校、病院、社会的施設其外都市としての諸機関概ね具備せざるものなく‥‥(中略)‥‥而して此大都を囲繞する地方数十里、農産、畜産、林産及び水産等各種の饒多なる物産を以て充たされ[30]

平壌は朝鮮に於ける経済都市であると共に、また西鮮第一の教育都市である。即ち併合以来諸般教育上の施設は漸を追うて進展し、現在（1932年－朴註）に於ては学校教育の完備は、京城に次ぐの地歩を有して居り[31]

このように「西鮮第一の教育都市」である平壌に師範学校が設置されたのは、単に大都市であったからという理由よりも、入学資格に適している優秀な人材確保のための、当局による地域配慮があったと考えられる。

さて、約7割の生徒が平南・平北出身であるが、彼らをサポートした父兄はどのような職についていたのか。平壌師範学校は官立であったが、1941年までは官費生は3割程度で、残り7割は私費生だった。故に7割の生徒らは学校生活に必要な諸費用を負担しなければならなかったのである。ここで、こうした経済的な支援者である父兄らの職業をみると以下のとおりである。

平壌師範学校生徒父兄職業（1936年度）

| 学年＼職業 | | 農業 | 工業 | 商業 | 官公吏 | 教員 | 医師 | 銀行会社員 | その他 | 無職 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | 66 | 2 | 11 | 10 | － | － | 2 | 3 | 4 | 98 |
| 2 | | 68 | 2 | 9 | 6 | 1 | 3 | 2 | 3 | 3 | 97 |
| 3 | | 48 | 5 | 14 | 9 | 1 | 1 | 2 | 4 | 1 | 85 |
| 4 | | 49 | 1 | 10 | 8 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 75 |
| 5 | | 46 | 2 | 11 | 13 | － | － | － | 2 | － | 74 |
| 1カ年講習科 | | 89 | 2 | 16 | 11 | 6 | 2 | － | 2 | － | 128 |
| 6ヶ月講習科 | 前期 | 57 | 2 | 9 | 4 | 1 | － | 1 | 1 | 1 | 76 |
| | 後期 | 66 | 1 | 3 | － | 3 | － | 1 | － | 1 | 75 |
| 計 | | 489 | 17 | 83 | 61 | 15 | 7 | 9 | 16 | 11 | 708 |

出所：『校友会誌』平壌師範学校、第6号、1937年。

当時の平南の経済状況について、「農業は平南の産業の中其首位を占め人民八割以上は農業者にして総生産額の七割内外は農産物也。又農業は産業の中心にして商工業は未た殆んと其の派生たる関係にあり。故に農業の振興は平南の開発上最も緊要なるのみならす朝鮮の統治帝国進展上一日も忽諸に附すへからさる重大問題」であると記されている。[32]まさに当時の農業は、平南を含む全朝鮮にとって、産業の中心的な役割を果たしていた。こうした状況を裏付けるように生徒父兄職業表でも、農業が7割を占めていることがわかる。

朝鮮王朝時代における学校の教員は、「両班」が大半を占めていたが、1894年以降は「中人」または「常民」が教職に進出することになった。実際、1913～22年の平壌高等普通学校師範科における生徒の親の身分をみると、「両班」52人に対し「常民」200人であった。[33]「常民」は農業をはじめ工・商などに従事する生産階級であったことを考えると、平壌師範学校生徒の親の身分は、主に「常民」出身である。これは、朝鮮王朝時期、支配層である両班階級によって身分的に独占された教職に、農民層の子弟が大挙して進出したことを意味する。ちなみに、「李朝政府（朝鮮王朝－朴註）は平安出身者を重用せざりし為め、平安道の儒学は他に比して隆盛を極めたとは云へな」かったのである。[34]

## 5．学校生活

平壌師範学校の教育方針(1931年度)は、「朝鮮ニ於ケル善良有為ナル初等学校教員ノ養成ニ在ルコト勿論ニシテ、左記[生徒教養ノ方針]ヲ制定シ、生徒ヲシテ夙夜之ガ体得ヲ期セシメツヽアリ」、[35]生徒教養の方針は「教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉体シ師範学校規程ノ示ス所ニ従ヒ強健ナル身体ト堅実ナル志操トヲ涵養シ以テ将来有為ノ教育者タラシメンコトヲ期スル」ことであった。そのため、学校の教育精神が要約されていた「五大綱領」(至誠・勤労・敬愛・自律・奉公)や「居常十則」[36]に沿って生活するよう心掛けられていた。その内容は、「信義敬愛ヲ旨トシ不正不義非礼ノ所為ヲ耻ヅベシ」「勤倹身ヲ処シ常ニ自学自修ノ態度ヲ以テ自己ノ修養ニ務ム可シ」「深ク自己ノ今日アル所以ヲ察シ感恩報謝ノ道ヲ講ズベシ」など、主に「将来有為ノ教育者」になるための、「自己ノ修養」であった。

ところが、1937年に勃発した日中戦争や1938年3大教育方針（国体明徴・内鮮一体・忍苦鍛錬）を柱として改正された「朝鮮教育令」により、教育方針はそれまでにも増して、国家の為の臣民を培うことになった。そこで、師範学校の一端をうかがうことができる1937年の平壌師範学校の学校日誌を参考にして、生徒の学校生活を吟味してみる。

まず、1年間の学校行事は以下のとおりである。(下線は筆者、下線の行事は説明を加える)

---

4月
1日 第1学期始業式、小山教諭新任式
3日 記念植樹
6日 尋常科入学許可予定者口述試問並に身体検査、94名入学許可、中原教諭告別式
7日 尋常科第1学年入学式
8日 1年講習科及び短期講習科入学式
9日 中原前教諭出発、小谷教諭告別式

10日 小谷前教諭出発、春季大掃除施行
13日 横井教諭新任式
16日 森山教諭新任式
18日 歩兵77連隊軍旗祭参加
26日 千葉命吉氏講演
27日 靖国神社臨時大祭のため休業
職員生徒一同早朝神社参拝
午前9時よりキネマ館にて映画見物
29日 天長節拝賀式

5月
1日 前教諭続典氏追悼会を西本願寺に於て行う
尋常科第4学年、第5学年修学旅行団出発
8日 第4、5学年以下遠足を行う
第4学年修学旅行団帰校
15日 第5学年修学旅行団帰校
20日 第4学年旅行感想発表会
光成高普対本校排球試合
22日 春季大掃除施行
26日 第4、5学年野外教練
27日 音楽会予行
29日 音楽会開催
31日 平壌神社国幣小社御列格報告祭参列

6月
1日 開校記念日
大野政務総監御訓辞のため職員生徒一同平壌医専校庭に参集
附属普通学校入学式
6日 金千代座に於て職員生徒一同観劇
本校校庭に於て西鮮女子中等学校陸上競技、排球競技大会開催
7日 第5学年生徒農村委託実習開始
10日 時の記念日
16日 服装検査
18日 輔導会総会学校長出席
21日 放課後本校職員庭球大会挙行
24日 大阪大相撲見学
25日 第4学年短期軍事講習開催
農業委託実習感想発表会
26日 初等学校体操科研究会に田鹿教諭出席

7月
1日 暁烏敏氏講演、中学対本校排球大会
7日 第1学期考査開始、研究発表会
10日 全生徒健康診断施行
13日 田崎、宮崎、柴田教諭出征壮行会
府営プールにて水泳練習開始
14日 田崎、宮崎、柴田教諭入営のため全校職員生徒神社参拝及び歓送
空襲防護班編成を行う
16日 ヘレンケラー女史講習会
17日 柴田教諭入営歓送
20日 終業式
21日 朝鮮排球選手権大会出場選手出発
22日 飛行第6連隊応召兵寄宿舎に宿泊
23日 職員生徒一同平壌駅に出征兵士迎送
25日 平壌連合防護団結団式参列
29日 全鮮中等学校篭球大会開催
出征部隊迎送
31日 短講終業式、大掃除

8月
11日 短講始業式、出征部隊迎送
13日、14日、16日、17日、18日、19日
出征部隊迎送
20日 出征兵士遺骨出迎
21日 始業式、大掃除、除草
23日 戦死者告別式参列、出征部隊迎送
24日 短講身体検査
30日、31日　出征部隊迎送

9月
1日 出征部隊迎送
3日 日支事変に関する講和（太田教諭）
6日 愛国日
7日 出征部隊迎送
11日 大毎平壌支局長北支事変視察談
13日 第5学年・長講軍事講習開始
15日 慰霊祭参列、分列行進合同体操練習
16日 傷病兵出迎
17日 出征部隊迎送
20日 教生標準授業（国語）
大衆劇場にて映画観覧
25日 府内男子中等学校連合野外演習
28日 運動会予行演習
29日 短講修了式予行・校友会送別会
30日 短講終了式・後期短講入学考査

10月
1日 体育日
2日 短講入学式

平壌師範学校について

3日 本校・附属連合運動会
5日 小・普学校教員検定試験開始
6日 愛国日
7日 京城日報事変ニュース観覧
9日 平南中等学校体操科研究会
出征部隊迎送
13日 戊申詔書奉読式
14日 長講第2学期試験開始
16日 松元・横井両教諭軍事教育受講のため77連隊へ
17日 神社参拝、旗行列
19日 講習科修学旅行団出発
20日 第3学年修学旅行団出発、出征部隊迎送
23日 遠足を行う
25日 白井視学委員修身科授業視察
修学旅行団帰校
26日 先哲祭、鎌塚編輯官講談、生徒研究発表、作業を行う
28日 上海戦勝祝賀旗行列
30日 勅語奉読式挙行

11月
3日 明治節奉祝式
4日 短講軍事講習
6日 愛国日
7日 本日より一週間国民精神作興週間行事
19日 長講教育実習開始
20日 防空演習本日より2日間
22日 飛行隊殉職者遺骨出迎
26日 戦死者遺骨出迎

12月
2日 第77連隊戦没将士告別式参列
4日 ニュース映画観覧
平壌府主催戦没者告別式に参列
6日 愛国日
8日 出征将士見送
12日 南京陥落祝賀旗行列
13日 第2学期考査開始（短講を除く）
22日 配属将校徳田中佐新任式
24日 終業式

1月
1日 拝賀式
6日 愛国日
11日 始業式
12日 家庭訪問報告会
19日 服装検査
29日 氷上運動会
30日 平南校長会議に内野教諭本日より二日間

---

では、学校日誌の内容を卒業生のアンケートや『平壌師範』、『校友会誌』を参考にしながら考察する。

4月18日の「軍旗祭」は、77連隊が創設され、軍旗が下賜されたことを記念する日で、平壌府内のすべての専門学校・中等学校生が参加した。

「修学旅行」は、「生徒教養ノ目的ヲ助成シ且ツ見聞ヲ広クシ心身ヲ鍛錬シ以テ教育者タルノ人格修養ニ資スルタメ」行なわれた。(37) 実際、生徒による1937年度の内地修学旅行の感想文には、「朝鮮と、風俗の懸隔の甚だしいのに驚いた」のほか、大阪城を訪ねて「内地人が如何に芸術的に優れた民族であるかゞ窺はれる。」そして、五重の塔をみて「歴史で学んだ一部分がうなづけた」(38)などの感想があり、まさに「修学旅行」は、日本帝国臣民としての朝鮮人の「見聞ヲ広」げる役割を果たしたようである。

行程は学年によって異なり、1学年鎮南浦の製錬所と林檎畑、2年生松林（兼二浦）の製錬所、3学年朝鮮内（5日間）、4学年満州（7日間）、5学年内地（15日間）であった。しかし、1941年以降は満州、1943年以降は内地旅行ができなくなり、代わりに扶余（百済の都）または金剛山になった。ちなみに、日程（1937年度）は次のとおりである。まず尋常科3学年は、10月20日平壌発→21日（京城・仁川）→22日京城発（車内宿泊）→23日（大邱・慶州）→24日（慶州・大邱）→25日

平壌着である。次に4学年の満州日程は、5月1日平壌出（渾河・撫順・奉天）→2日奉天→3日（公州嶺・新京）→4日新京→5日（鞍山・大連）→6日（旅順・大連）→7日大連→8日（蘇家屯・平壌着）である。最後に5学年の内地日程は、5月1日平壌出→2日（釜山・下関）→3日（宮島・厳島・広島・大阪）→4日（湊町・吉野口・吉野）→5日（・法隆寺・奈良）→6日二見浦→7日（山田・名古屋・藤沢・江ノ島）→8日（鎌倉・横須賀・東京）→9日東京→10日（上野・日光・中禅寺）→11日（大宮・与野）→12日大津→13日京都→14日（下関・釜山）→15日平壌着である。

一方、日本における修学旅行の嚆矢は、1886年の東京師範学校の「行軍旅行」であり、主な旅行先は国内であった。[39]そして1906年度に広島高等師範学校や秋田県師範学校などが、国外の「満韓修学旅行」[40]を実施し、やがて1912年には「満鮮地方ニ修学旅行ヲナサシメ同地方ニ於ケル学術上ノ研究ヲナサシムルト同時ニ日露ノ戦跡等ヲ視察セシムル向モ有之右ハ学術上ノ効果ハ勿論拓地殖民ノ思想ヲ喚起シ忠君愛国ノ念ヲ涵養スル等教育上ノ裨益不尠儀ト在候処右旅行ノ場合」は、「満州・朝鮮地域への修学旅行奨励のために現地の鉄道料金・寄宿料など割引」した。[41]さらに1931年の満洲事変、32年の満洲国の成立、大陸への日本青少年の移民等を契機として、大陸への関心がますます深まりゆく時勢を反映して、各学校の修学旅行にも朝鮮・満洲方面へ旅行する傾向が著しくなってきた。[42]むろん、旅行日程をみると、日本の大陸植民地政策を理解させようとするものであった。しかし、太平洋戦争が勃発し、時局が切迫して来るに従って、その日数も減少し、ついに1943年以後は、自粛するようになった。[43]

「農村実習」のような課外作業は、「勤労自治愛好ノ精神ヲ助長スルタメ」[44]に課され、平壌農業学校教諭の指導によって行なわれた。

「出征部隊迎送」は、1937年7月日中戦争が起こり、中国に出征する軍の歓送のため全校生徒が交代で動員された。1936年度の学校日誌には「出征部隊迎送」という行事がなかったのを考慮すると、この行事は日中戦争勃発以降に始まったことになり、そのため様々な軍歌を習い、朝会には戦況宣伝を兼ねた訓話が増えたのである。また「戦死者告別式」にも動員されるようになった。

平常時には尋常科の場合、4学年1週間、5学年2週間の「軍事講習」を陸軍第77連隊の営内の内務班で受けた。そして講習科も類似の「軍事講習」を受けたが、日中戦争の長期化に伴い、兵営使用が不可能になって本来の軍事講習は1940年を境になくなった。では、「軍事講習」の内容はどういうものであったのか。実際に軍隊教育を受けた申東星（1937年3月、講習科卒）の記録から、まず、その目的と方法をみることができる。軍隊教育の目的は「軍人及軍隊を訓練して戦争の任に当らしむるにあり。即ちわが国民性なる義勇奉公の大和魂を砥礪拡充するにあり」、方法は「精神教育、技科教育、学科教育、内務教育の如く区分ありと雖も分別し得べきものにあらずして何事にも精神教育に根底を置きて内務学術教育の渾然一体を期すべきなり。抑々軍隊生活とは起居の間に軍人精神を養ひ厳粛なる軍規に慣熟せしめ堅固なる団結心を養ふにありて教育の方法は此より出るものな」りと記している。[45]次に教育内容は、初日に内務班編成、連隊長の訓示、健康診断などが終わると、内務班に入る。そこには軍服、食器、手箱が置かれており、下士官や上等兵の指示に従って携帯品や配給品一切の整理に着手する。そして大掃除、午後6時30分食事、8時30分点呼、9時30

分就寝である。2日目からは軍隊教育の一般と軍隊生活の大要を学び、午後からは各個教練、分隊の疎開前進及び突撃前進教練、射撃動作など様々な軍事訓練を受けるのである。(46)

そして、11月7日からの「国民精神作興週間行事」は次のような内容で行なわれた。

第1日　11月7日（日）神社参拝、国体明徴日
1．平壌神社参拝（午前7時）通学生ハ午前6時10分迄ニ片倉ビルディング前ニ集合ノコト
2．皇居遥拝（於神社）
第2日　11月8日（月）勤務尊重、努力奮闘日
1．皇居遥拝（朝礼ノ祭於玄関前）
2．学校林ノ開墾（全校生徒ヲ2分シ半分ハ開墾作業ニ）
3．紙屑焼棄場工作（半分ハ紙屑焼棄場工作及清掃作業ニ当ルモノトス）
4．校舎内外ノ清掃美化
第3日　11月9日（火）生活改善、反省戒心日
1．皇居遥拝（前日ニ仝ジ）
2．時間ノ厳守並ニ善用
3．用便後ノ手洗励行、手洟、放唾ノ絶対禁止、紙屑ノ散乱絶対禁止
4．水道水、電力ノ節約、学資学用品ノ節約
5．廃物ノ利用工夫
6．物心両方面ニ於ケル生活内容ノ反省自戒
7．生活改善ニ関スル講話（韓教諭）
第4日　11月10日（水）詔書渙発記念日、克己忍苦、時局認識日
1．平壌神社参拝（午前8時半）通学生ハ午前7時40分迄ニ片倉ビルディング前ニ集合
2．伊勢神宮及皇居遥拝（午前10時玄関前）
3．詔書奉読並ニ総督声明朗読（於講堂）
4．国民精神作興並ニ時局認識ニ関スル訓話（学校長）
5．塩飯弁当又ハ日ノ丸弁当
6．国民精神作興ニ関スル詔書ノ謹写（放課後家ニ於テ謹写シ翌日組主任ニ提出）
第5日　11月11日（木）公徳実行、公共奉仕日
1．皇居遥拝（朝礼ノ祭於玄関前）
2．公衆衛生、公衆道徳ノ尊重励行
3．路上清掃作業
4．応召職員家族ノ慰問
第6日　11月12日（金）健康増進日
1．皇居遥拝
2．兎狩

第7日　11月13日（土）報恩感謝、国民親和日

1．皇居遥拝（朝礼ノ祭於玄関前）

2．就床前祖先ノ霊ニ対シ黙祷礼拝

3．謝恩通信（最後ノ時限ニ教室ニ於テ認メ組主任ニ提出）

4．保証人訪問

大邱師範学校は、1938年に『国家総動員時下新教育令に基く本校教育要綱』を作成し、教育目的として「聖旨を奉体し、朝鮮統治の方針に則り、教育法令の命ずる所に従ひて、皇国臣民たるの信念を固しく、尽忠報国の赤誠に燃え、滅私奉公の実践に徹し、以て皇道を八紘に宣べ、国史を万世に輝かさんとする忠良有為なる半島教員を養成する」[47]と明記した上、あらゆる行事の遂行、学科の指導、環境の統制、施設運営などは、この方針を中心において行なわれることになった。そして生徒の教養上、重要なものとして、「国民精神総動員強調週間」（紀元節拝式・宮城遥拝・訓話・体操・作業・教練・神社参拝・建国祭・祈願祭）や「銃後の報国強調週間」[48]（貯金節約の励行・廃品の募集及利用・勤労報国・感謝黙祷・神社参拝・病兵慰問）を設けるなど、日頃から徹底した生活が強いられた。こうした「強調週間」は、平壌師範学校の「国民精神作興週間行事」と、その内容が類似することから、既に1938年の「朝鮮教育令」改正より先に各学校において3大教育方針の予備生活が行なわれたことになる。

一方、日本の師範学校においても、1938年以降教科以外の学校行事は一層重視された。東京府青山師範学校の1938年度の学校行事をみると、「靖国神社の春秋2回の例祭にあたって全校生徒教職員が靖国神社に参拝すること、最上級生が配属将校に引率されて短期現役兵の慰問に赴くこと、軍施設に起居して軍事講習を受けること（一部5年と二部2年は7月に2週間、一部4年と二部1年は12月に1週間）等は前の時代から引きつがれた軍国主義的学校行事の主要なものであったが、この時期になると陸海軍人による時局に関する講演などが加わり、精神面からの軍国主義的行事が目立ってきた。」[49]このように学校行事が、平壌師範学校の学校行事と類似していたことから、同時期において朝鮮のみならず日本においても、ますます軍国主義的教育が強いられていたことがわかる。

次に生徒らの日常学校生活について考えてみる。

毎日の朝会においては、挨拶・訓話・簡単な体操が行なわれ、朝会が終わると、級長の引率に従い学級別に分散入室した。また随時に「容儀検査」が行なわれたが、こうした朝会も皇国臣民化教育の強化に伴い宮城遥拝・皇国臣民誓詞の斉誦などが追加され、木剣体操朝会・教練朝会に変貌して行った。ちなみに、皇国臣民誓詞の斉誦や木剣体操は内地では行なわれず朝鮮のみであった。さらに、曜日によって分列式が含まれた教練朝会、体育館での坐禅朝会、軍歌などの新曲歌謡を学ぶ音楽朝会、漢詩吟詠朝会なども行なわれたという。[50]このような「皇国臣民化」に関して鈴木元京城帝国大学教授は、「創氏改名大麻の奉戴神宮参拝皇国臣民誓詞の斉昌禊を中心とする錬成等一連の皇国臣民化運動が民族感情を尊重するの遑なく、皇国臣民化を強行せられたが為に、皇国臣民化

に負担を感ずる様になり、加えて労務徴用食料供出眞鍮、食器供出等による、生活面の重圧による日本国民たることに負担を感じ民族の苦難のみを意味するに至つた」[51]とし、民族の存在を否定する行き過ぎた同化政策を強行した事、また余りにもその運動が形式的になり、却って逆効果を生んだと、批判している。

寮は第1寮、2寮、3寮、4寮があり、4人収容を基準とする80個の部屋があった。寮は自治生活で、各室・寮には室長・寮長があり、室長は4・5学年、寮長は5学年であった。そして学年の初期、または中期に室を換えるので、室長・寮長の任期は6ヶ月位であった。炊事委員は週単位で献立を作り、衛生委員は寮内の清潔を、そして販売部は簡単な学用品や間食販売を担当した。生活は時間厳守生活で、起床、就寝、食事、消灯時間が決まっており、まるで兵営生活のようであったが、こうした団体生活や日本式生活を通じて自治能力、責任と義務、奉仕精神などが培われたという。さらに、朝鮮人・日本人が互いの生活風習について教えてもらうなど、温い心の交流を深めていったが、時間制限による束縛、細々とした規則による引き締めは、かなり窮屈な生活であったという感想もある。[52]

そして、学校の生活規則は、いずれは学童達と地域社会の師表になるべきであるという学校当局や学生らの自覚が厳正な規則を生み出した。まずは容儀の端正である。そのため新入生は修身の時間に日本の普遍的な「礼儀作法」を習った。その中でも、特によそ見・立ち聞き・手洟・長い爪や髪・朝鮮語使用などは厳禁された。上述した「国民精神作興週間行事」のうち、用便後ノ手洗励行、手洟、放唾ノ絶対禁止、紙屑ノ散乱絶対禁止などからも、徹底した基本礼儀を身に付けさせたことがわかる。また、服装なども時間によって異なった。すなわち、体操の時間には白い体操服、農業の実習時間には農業服（短袴下衣）に地下足袋、教練時には編み上げ靴に脚胖であった。校内では白色の運動靴、室内では白色の室内靴、そして校外外出の時は必ず編み上げ皮靴を履くべきであった。ちなみに、尋常科新入生は、入学式以前に、1年間あるいは在学期間中使用する学用品の費用や被服代などを一括納付した。むろん、その費用は父母の負担である。そして入学後、教科書・辞典・夏服・運動服・運動靴・室内靴・筆墨・農具・農業服・編み上げ靴・スパイク・スケート・冬服・オーバー・脚胖などを季節によって補給して貰った。

学校の卒業式において平安南道知事安武直夫は、初等学校を「国民教育ノ進展ニ任ジ、地方ニ於テハ教育教化ノ中心トシテ大衆ノ教化ト社会文化ノ発達トヲ促ス」[53]所であると位置付けており、また朝鮮総督南次郎は、初等教育こそ「将来国家ノ負荷ニ堪フベキ忠良ナル皇国臣民ヲ育成スルヲ以テソノ本義」[54]であると述べた。このように既に卒業生らには、単に生徒を教える訓導としてばかりでなく、「大衆の教化」という役割も求められていた。さらに、平壌府尹の高橋敏は、「今諸君ガ赴カントスル所ハ、多クハ農村デアリマス。故ニ農村ニ関スル認識ヲ有セズシテハ、眞ニ価値アリ有用ナル教育ハ不可能ナル事デアリマス」と述べ、赴任の事前に農村事情を把握することを強調した。実際に卒業生は、一部を除いて農村地域に多く配置されたのである。当時の朝鮮において、農業はまさに基礎的産業であり、農業の発達こそ、国の産業の発展であったため、教師は地域の児童・青年の指導者に止まらず、広く教育・行政・産業の公民的施設の指導者としての役も求められ

た。[55]金麟桓（1938年3月、講習科卒）の場合、赴任先は僻地で、1・2学年、3・4学年の複式教室を持つ、教員3人（自分を含めて）の学校で、初任給は42円、そして下宿費が10円で、子どもらに飛行機を教えるには問題なかったが、汽車や海を説明するには苦労したという。　そして、同年の卒業生である朴寛燮（講習科）は、初任地として江原道の僻地である洪川郡の牟谷小学校に配置されたのは、思想問題が影響したという。一方、金潤換（1937年3月、講習科卒）は、願ってもいなかったのに出身地である咸鏡北道に、なおかつ道庁所在地の羅南普通学校に配置されたという。このように赴任先に対する感想は多少違うが、赴任地は農村地域が多かった。

## 6．おわりに

植民地朝鮮における教員養成政策を考察するため、一事例として平壌師範学校を中心に、学校の沿革、教職員、生徒の出自や生活を追究してみた。

教職員は、校長3名をはじめ、延べ80余名が4年以上平壌師範学校に在職し、設立当時は主に公立師範学校から、30年代には訓導兼公立師範学校教諭歴を持つ者が、そして、40年代は商業学校教諭歴の者が多く就任した。

生徒は、特に尋常科の場合、1941年までは朝鮮人が9割を占めたが、兵役延期制度がある師範学校に多数の内地人志願者が集まってきたので、以降は内地人が大半を占めるようになった。そして、朝鮮人初等教育拡充計画による教員確保のため、1942年から「全員官費生」「学資金引上げ」などの策を講じ、生徒募集が行なわれたものの、教員不足の現状は改善できず、内地から教員を招聘してきた。平壌師範学校の生徒は地域的に平安南北道の出身が多く、また大部分は農業を営む父兄によってサポートされた。これは朝鮮王朝時代の学校の教員は、「両班」が大半を占めていたが、1894年以降は「中人」または「常民」が教職に進出することになり、植民地期は大勢の農民層の子弟が教職に就いたことを意味する。

そして、1931年度の教育方針は、主に「将来有為ノ教育者」になるための、「自己ノ修養」も強調されたが、1937年勃発の日中戦争や1938年3大教育方針（国体明徴・内鮮一体・忍苦鍛錬）の下で改正された「朝鮮教育令」により、教育方針はそれ以上に、国家の為の臣民を培うことになった。また、卒業生には、単に生徒を教える訓導としてばかりでなく、「大衆の教化」という役割も求められ、地域に於いては行政・産業などの分野の指導者としての役割も課された。

平壌師範学校の日本人卒業生も、引き揚げ後、引き続き教師として活躍したケースが多い。植民地平壌との関わりがある人々の会員誌である『想い出の平壌』[56]には、平壌師範学校の卒業生が大勢載っており（本科42名、講習科106名、演習科6名、尋常科13名）、そのうち、日本の小学校の教員・教頭・校長として66名、中学校の教員・教頭・校長として40名、そして、高校・大学、または教育機関に25名がそれぞれの現場で活躍した。勿論、これらの数字は卒業生の一部分であるが、戦後における日本の教育現場にも平壌師範学校の痕跡は残っていたことがわかる。

このように本稿では、平壌師範学校について吟味してきたが、参考にした資料が1935年以降の

ものが多く、それ以前のものは少なかったため、主に学校生活などの考察は1936年以降について行なった。また、同じ時期、日本内地の師範学校の寮生活との比較、そして教育実習に関しては触れていないなど、課題として残されている部分も多い。

〈註〉(※印はハングル文献)

(1)『植民地教育の支配責任を問う』植民地教育史研究年報、第4号、2002年、203～204頁。
(2) 同　上、205頁。
(3) 同　上、231頁。
(4) 拙稿「植民地朝鮮における教員養成－師範学校出身者を対象とする聞き取り調査を中心に－」『九州教育学会研究紀要』第28巻、2000年、293～299頁。「京城女子師範学校について－卒業生のアンケートを中心に－」『九州教育学会研究紀要』第29巻、2001年、259～266頁。
(5) 岡久雄『朝鮮教育行政』帝国地方行政学会朝鮮支部、1940年、196頁。『朝鮮教育新聞』第77号、7面。
(6) ※『平壌師範（第2輯）開校70周年記念誌』平壌師範学校同窓会、1999年、280頁。
(7) 同　上、111頁。
(8) 稲葉継雄『旧韓国～朝鮮の日本人教員』九州大学出版会、2001年、240頁。
(9) 韓悌泳は、39年以後西原悌一と改名、45年まで在職し、「昭和20年8月下旬、金日成政府役人来校、上山校長、西崎教頭、韓悌泳教授に私（波根治郎・40年赴任―朴註）が立会い学校印を渡した。」という証言のように第4代平壌師範学校長に就任した。※『平壌師範（第1輯）開校60周年記念誌』平壌師範学校同窓会、1990年、245頁。
(10) 稲葉、148頁。
(11) 田鹿からは、忍苦鍛錬の性品を培う信念を教えてもらったという。『平壌師範（第2輯)』、114頁。
(12) 続典のすべての授業は、現場指導を通して行なわれ、生物に対する趣味や好奇心を持つように指導してくれたという。同　上。
(13) 崔徳鉉は、41年以後高村徳彦と改名し、45年まで在職した。
(14) 李崇寧は、41年以後延原崇と改名し、45年まで在職した。
(15) 稲葉、300頁。
(16)『平壌師範（第1輯)』、245～246頁。
(17)「42年の4月からは附属国民学校の主事になりましたので、師範学校での授業は週に二・三回程度であったと思います。その傍ら大同工業専門学校の非常勤講師として、週に一回出向いておりました。」同　上、244頁。
(18) 同　上、249頁。
(19)『平壌師範（第1輯)』、81頁。

(20)『朝鮮総督府官報』第4775号、1943年1月4日。
(21)『平壌師範（第2輯)』、91頁。
(22)『朝鮮総督府官報』1939年～1942年。
(23)『平壌師範（第1輯)』、256頁。
(24) 船橋治『朝鮮総督府帝国議会説明資料』第5巻、不二出版、1994年、109～112頁。
(25) ※『毎日新報』1940年、3月6日。
(26) 同　上、1939年、12月1日。
(27)『朝鮮総督府官報』第450号、明治45年。
(28) 同　上、第1040号、大正5年。
(29) 同　上、第2527号、大正10年。
(30)『平壌全誌上』、15頁。
(31) 朝鮮総督府『平壌府』1932年、221頁。
(32)『平壌全誌上』、259頁。
(33) アジア教育史2002年次大会口頭発表「植民地朝鮮における教員養成－生徒・教員の 出自を中心に－」
(34)『平壌府』、220頁。
(35)『平壌師範学校要覧』1931年、4頁。
(36) 同　上、5頁。
(37) 同　上、54頁。
(38)『校友会誌』平壌師範学校校友会、第7号、1937年、145～157頁。
(39) 佐藤秀夫編『日本の教育課題＜第5巻学校行事を見なす＞』、東京法令出版、2002年、434頁。
(40) 同　上、437頁。
(41) 同　上、483頁。
(42)『東京学芸大学二十年史－創基九十六年史－』、1970年、537頁。
(43) 同　上、573頁。
(44)『平壌師範学校要覧』1931年、49頁。
(45)『校友会誌』平壌師範学校校友会、第6号、1936年、110頁。
(46) 同　上、98～102頁。
(47) 大邱師範学校『国家総動員時下新教育令に基く本校教育要綱』1938年、15頁。
(48) 同　上、64～66頁。
(49)『東京学芸大学二十年史－創基九十六年史－』、1970年、545～547頁。
(50)『平壌師範（第2輯)』、81～88頁。
(51) 大蔵省管理局『日本人海外活動に関する歴史的調査』（1946年刊）第2巻、朝鮮編1、196頁。
(52)『平壌師範（第2輯)』、83、131～133頁。
(53)『校友会誌』第6号、87頁。

(54)『校友会誌』第7号、245頁。

(55)『校友会誌』第6号、94頁。

(56)『想い出の平壌』全平壌楽浪会編、1977年、352～436頁。

# Pyongyang Normal School: An example of teacher education in colonial Korea

PARK Younggyu

Study of the education and school history, school staff, students in the school and the students' life style of the Pyongyang normal school was the aim of this study. In the history of staff members who served the Pyongyang normal school were, 3 principals and 80 teachers served the school more than 4 years who were taken in 1929 mainly from public normal schools, instructors having teaching experience in public normal schools in 1930s, and from business schools in 1940s those having teaching experience. Ninety percent of the students who belonged to the department of common education up to 1941 were the Korean people and later, the majority was of the Japanese who came in large amount to join the school of military services and adjournment system as volunteer. To provide the expenses of the teachers, extended elementary school education plan was made and from 1942, government supported all the members with reduction in student fees but there was no improvement in the staff lacking aspect and then Japanese teachers were invited to meet the staff lacking.

Geographically, the students in Pyongyang normal school were mostly from Pyongannambug area and were supported by their families having agriculture. School teachers in the Korean monarchical period were mainly from the ruling class and after 1894 the teaching professionals were from the productive class and in the colonial period these were the children from farmer layer. The graduates from the Pyongyang normal school were not only educated to become instructors or teachers but also to engage in civil and public services, administration and manufacturing.